100の一歩

＃65　　グリーンライン６両化の裏側

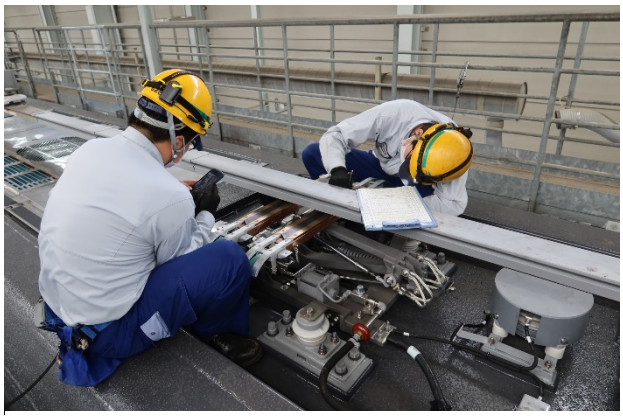
横浜市営交通の取組とそこに込める思いを発信する“100の一歩”。
今回は、グリーンライン６両化について川和車両基地よりレポートします。

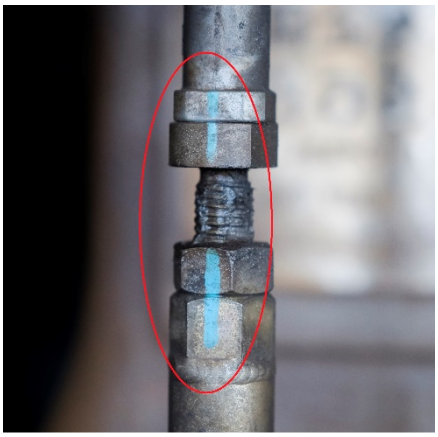
現在４両編成で運行している横浜市営地下鉄グリーンラインは、混雑緩和と沿線のまちづくりの観点から、令和４年９月24日（土）から順次６両編成車両が導入されます。６両化事業では、既存の４両編成車両を２両ずつ離し、中央に新しく作った中間車両２両を増結し、６両編成車を完成しました。

車両が長くなるということは、今ある施設・設備を延長しなければいけません。車両基地の全ての施設を延長する、大掛かりな工事が急ピッチで行われました。工事中も営業している４両編成車両の検査を止めるわけにはいきません。検査を行うすぐそばで、車庫の延長工事が進められるなど、普段と全く異なる環境で通常業務を継続しました。車両の一部を増やすことは市営地下鉄では前例がなく、調整の連続。やりくりしながらの大変な作業でした。
結合する前後車両４両も車いす・ベビーカースペースの表示を一新し、車内ビジョンを更新しました。また、運転台もリニューアル。ワンマン運転で運行するグリーンラインの運転台には、お客様の乗降を確認するため、ホームに設置したカメラの画像を表示するモニターがあります。運転台で確認するモニターも一新し、くまなくホームの様子を確認できるようにしました。

５月、こうして受け入れ体制が整った基地に新しい中間車両２両が到着。6両編成車として組み立て、いよいよ試験が始まります。
まず、車両基地内で30人近くの技術者が15日間みっちり試験を行います。車両基地内で行う試験はいわば、車両を動かすための準備運動。新しい２両編成だけでなく、６両編成全体をつなげて電気を通し、不具合がないかも調べます。
試験は視覚、聴覚、嗅覚、触覚をフル稼働。外装にきずやへこみ等がないか目を凝らし、エアコンをつけた後、異音がないか耳を澄まし、異臭がしないか、扉を動かし突っかかる感覚がないか等を確認。不具合を見つけ出すため、注意のアンテナを張り巡らします。
新しい車両は「開けられるところは全て開ける」が基本です。１両あたり100か所以上ある蓋という蓋を全て開けて、確認して、閉めて。チェックを繰り返しました。
新しい車両は「開けられるところは全て開ける」が基本です。１両あたり100か所以上ある蓋という蓋を全て開けて、確認して、閉めて。チェックを繰り返しました。

ねじの緩みは車両にとっての致命傷となり、故障や事故を引き起こす原因となります。車両の部品の間には、ねじが正確に閉まっている位置に直線が引いてあります。合いマークと呼ばれるそのマークはねじの緩みを発見するための目印です。１両あたり1,000以上あるアイマーク。その一つひとつを目で見て確認していきます。


車両の上のパンタグラフを検査


部品の間に引かれた水色のアイマーク

基地での検査が終わったら、いよいよ車両を走らせます。ベテラン運転士が確認しながら試運転する車両に同乗します。車輪から異音はしないか、乗り心地に違和感がないか、ブレーキの利き、加速はどうかなど、６両編成車を実際に走らないと分からないこともあるのです。
列車は決まった場所に止まらないと、ホームドアが開きません。６両編成の車両もホームドアがきちんと開くか、その確認は、終電後から始発までの限られた時間に行います。午前１時に車両基地を出発してから午前４時の始発間際まで、お客様のいない深夜の駅で人知れずひっそりと試運転検査をしていました。

安全な車両を提供するには確認の上の確認が必要です。あらゆる可能性を考え運行前に「うみ」を出し切りそれを取り除いておく。どんな不具合も取り逃さないという決意で、お客様がご乗車になるその日まで、検査の日々が続きます。

川和車両基地内の６両編成車（左奥は４両編成車）

川和車両基地検修区職員